

愛され上手は程遠い!?

目次

第二章	第一章
熱愛過剩	自意識過剩
155	4

第一章 自意識過剰

プロローグ

私——田中夕夏は、男の人が大の苦手だ。

異性であることを意識するあまり、いつも変な態度を取ってしまうから。そんな私の態度は当然、相手の気分を害するし、その結果何度となく『自意識過剰な女』と思われてきた。

誰も私になんて興味ないと、頭ではわかっている。でも、周りの目を気にしすぎてしまう癖が抜けず、二十四年間誰ともお付き合いしたことがないまま。さすがに最近では、焦る気持ちもあるけれど、どうすることもできず日々を過ごしている。

——私が自意識過剰だと最初に自覚したのは、小学五年生の時だった。

当時はそんな難しい言葉は知らなかったけれど、もしかしたら自分は、恥ずかしい勘違いをしたのかも、と気づいたのだ。

それは、家が近所で、一緒に登下校していた男の子との悲しい思い出。

女友達を含めても、彼とは一番仲良かった。ゲームなどの趣味も合って、いつも一緒にいたように思う。

おませな周りの友達からは、『付き合っちゃえば!?』とひやかされたものの、彼のことが大好きだったから否定しなかった。

……今思えば私は、同い年の子たちと比べて、考え方が少し幼かったのかもしれない。好きな人を他人に知られることを恥ずかしいと思わなかったし、隠そうともしていなかった。本当に彼と「こいびと」になれるかも、と秘かに胸を高鳴らせていたくらいである。

しかし、現実はそう甘くなかった。

私が彼のことを好きだと知った男の子たちが、私たちをからかい始めたのだ。すると、好きだった男の子の態度が一変し——

『ふざけんな、ブス！俺のことが好きなんて、気持ち悪いこと言うなよ！お前なんて、最初から大嫌いだ』

そう言っつて、もう二度と笑いかけてくれることはなかった。

次にまた、同じようなショックな経験をしたのは中学生の時。

入学したばかりの頃、放課後に友達と連れ立って、どの部活に入ろうかとグラウンドや体育館を回っていた時だった。

『うわ、すげえ可愛い子がいる！超好み！』っていう声がすぐ近くで聞こえた。見るとそこには

数人の、先輩と思しき男の人の姿。そして今、声を上げたであろう人が私に笑顔を向けてきた。

さらに彼は私に近付いてきて、こう続ける。

『ねえねえ、うちの部のマネージャーしてくれない？』

その人は柔道部に所属していると自己紹介した。先輩はすぐく堂々としていて、女子に声をかける時にもまったく恥ずかしがったりしない。周りの友達に冷やかされても『羨ましいんだろ！』と撥ねのけた。小学生の頃、思春期特有の異性を意識する心境があまり理解できていなかった私。そのせいで好きな男の子に嫌われてしまった経験があったため、先輩の態度はすぐく大人でかつよく見えた。

——わざわざ自分に声を掛けてくれるなんて嬉しい！

ドキドキして、舞い上がって、一緒に見学していた友達の朱里と、すぐさま入部を決めた。

毎日の洗濯に飲み物等の買い出し、部員たちのストレッチの手伝いなど、柔道部のマネージャーは重労働だった。

だけど、『重いものの買い出しは俺と一緒に行くから言えよ』と言って先輩が手伝ってくれたから頑張れたのだ。それに、買い出しの帰り道、二人だけでアイスクリームを食べたりもして楽しかったから。……デートみたいだと、思っていた。

そんな風にして、いい雰囲気でも過ごしていたある日。

『夕夏、毎日ありがとな』

ふいに先輩が、私を呼び捨てにした。今まではずっと名字で呼ばれていたから驚いて、『いえっ……！』とかなんとか、よくわからない反応をしてしまう始末。
けれど先輩は、戸惑う私になにも言わなかった。そして、以降は名前呼びが定着した。

もう一人のマネージャーである朱里のことは『生田』と名字で呼んでいたし、知る限りでは先輩が女の子を呼び捨てにするのは私だけだったと思う。

それに、遅しくて大きな手で、いつも私の頭を撫でてくれた。

缶ジュースを飲んでいると先輩が現れて、私が飲んでいた缶にそのまま口をつけるようなこともあった。ジュースを飲むたびに上下する先輩の喉仏を見ていると、彼が男の人だということを急激に意識してしまつて心臓が破裂しそうだったのも、よく覚えている。そんな私を見て先輩が、『間接キスだな。でも、お前と俺なら、いいよな？』と言つてニヤリとしたことも。

——先輩は、私のことを特別に想つてくれているのかな？

そんな淡い期待を抱いていた。
早く想いを伝えて、恋人になりたい。最初はそう思つたけれど、告白するのは先輩が部活を引退してからにしようと考え直した。

もし付き合えたとして、他の部員に気を遣わせるのは悪いし、意識しすぎて自分が変な態度を取つてしまふそうだと思つた。それに、先輩から告白してもらえたら、飛び上がるほど嬉しいとも……

そして私たちの関係は、ただの先輩後輩から変わることはなく、ついに先輩の引退の時が来た。
引退試合のあと、誰もいなくなった道場。先輩に残つてもらえるよう頼んでおいた私は、勇気を

振り絞って『好きです。付き合ってください』と伝えた。
すると……

『あゝ、悪い。俺、彼女いんだよ』

眉間にしわを寄せて迷惑そうに言う先輩。

ポカンとする私に、彼はさらに深いため息を吐く。

『なんでこのタイミングで告白なんかすんだよ。断った手前、これから俺が部活に顔出しにくくなるだろ。……つたく、めんどくせえ』

本当にこれは先輩がしゃべっている言葉かと、耳を疑いながら彼の口元を見つめた。

——あんなに優しくかったのに。あんなに、「特別」を感じていたのに。

そのすべてが私の思い違いだったことがショックで、あからさまに嫌そうな態度を取られたことが悲しくて。なにも言葉を発することができなかった。

『うざい』

そう言い捨てて彼は立ち去り、卒業までほとんど部活に顔を見せることはなかった。

柔道部の同級生が『先輩、なんで来てくれないんだろ。稽古つけてほしいな』と寂しそうに言う声に、胸が痛んだ。

……私のせいで、ごめん。

他のOBが来てくれるたびに、先輩がいけないことが申し訳なくて、涙をこらえていた。

先輩との一件が応えた私は、高校生になる頃にはかなり警戒心を強めていた。

自分の思い込みの激しさを自覚し、男子と仲良くならないと決めたのである。

仲良くなって、好きになって、また同じことになったら……って思うと、怖くて。

できる限り、話したくないし、関わりたくなかった。

挨拶されても目を合わせることもできずに、返事をするのも俯いたまま。男女ペアで行うような

日直さえ、無言で自分の仕事を終わらせてさっさと帰った。

そんな態度だったから、男子からは好かれてなかったと思う。

でも、それでいい。そう思ってた。

そして迎えた二年生の体育祭。

二年生はフォークダンスが演目にあつた。一年以上男子を避け続けた結果、男子への免疫がまったくなくなつた私。練習で手をつないでだけで、顔がカーツと熱くなるのがわかつた。

授業をサボるわけにはいかず、頑張つて練習を続け、当日も無事に終えることができた。

しかし、体育祭当日、またしてもショックな言葉を聞いてしまったのだ。

ようやくダンスが終わり、一人ホツとして木陰で休んでいる時に聞こえてきた、クラスの男子たちの笑い声。

『ダンスで手をつなぐたび、真っ赤になんの！』

瞬時に自分のことを言っているのだとわかつた。

気が付かれないように小さく体を丸めて息をひそめた。

『あいつさ、自意識過剰だよな。いつつも男子を警戒しまくってるけど、なに？ 手え出される
とでも思ってるのかよ』

『勘違いしてんじゃねーよ』
ぎやはははっ。

大きな笑い声を上げながら、すぐ近くを通り過ぎていく男子たち。

恥はずかしくて恥はずかしくて、消えてしまいたい衝動に駆かられる。その後しばらく、顔を覆おってそ
の場でうずくまることしかできなかった。

その後は、高校卒業と同時に、それまでの友達みんなと連絡を絶ち、逃げるように大学へ進学した。
自意識過剰と思われていた自分を知る人がいない場所で、静かに暮らしていきたい。その一心
だった。

男の人と関わって、『勘違い』『自意識過剰』——そんな風に思われるのが怖い。

もう誰かを好きになって傷ついたり、相手も私を好きかもしれないなんて舞まい上がったりしたく
ない。私は心に嚴重に鍵をかけて、生涯一人で生きていこうと誓ちかったのだった。

1

時は流れて五年後。

私は、工専用車両や建築機械のレンタル会社に就職した。パワーショベル、掘削機械くわく、発電機、
コンプレッサー、高所作業車などなどの大型機械を扱う会社だ。そこで営業事務の仕事をしている。
仕事にも慣れてきた社会人二年目のある日、大学時代の同級生・祐子ゆうこと電話をしていた。

祐子と出会ったのは、大学に入ってからしばらくした頃。とある講義の教室で出会った。

『あなた、田中夏なつっていう名前なの？ 私は「田中祐子たなか」。私たちって、名前が似てるね！』

確か最初は、そんな風に話しかけてくれたはず。

祐子は社交的で友人が多く、かなり分厚い自分の殻に閉じこもっていた私にも気さくに話しかけ
てくれた。私たちは、すぐに仲良くなった。

当時の私は、人目を過度に怖がっていたため、祐子が遊びに誘ってくれても、ほとんど応じな
かったと思う。それでも彼女は嫌な顔をせず、私のペースに合わせて付き合いを続けてくれた。

大学を卒業して一年以上経った今でも連絡を取り合う、唯一ゆいの友人だ。

その祐子が、結婚することになった。前々から話は聞いていたけれど、今日正式にプロポーズを
受けたそうだ。

そんな彼女が、喜びの報告とともに、こんな提案をしてきた。

『私の独身最後の思い出に食事会しよう！ ちょっといいところ、予約したの！』

そう言われて、断る理由はない。むしろこういう場合は、私から誘うべきだったのに、なんて気
がきかないのだ。自分がかっかりしながらも快諾し、当日着る服とか、結婚祝いのプレゼントとか
を準備して、すごく楽しみにしていた。

しかし数日後、ふたたび祐子から電話があつて――

『今度の食事会の時、夕夏に紹介したい男性がいるの。康司こうじの友達なんだけど、二人とも連れてきていい？』

――その言葉で、状況が一変した。

康司さん、というのは祐子の旦那さんになる方で、私も何度か会ったことがある。

といつても、祐子と遊ぶ時に彼が送迎役を買って出てくれて、少し車に乗せてもらった程度だけ。しかも、会話したことはほとんどない。

康司さんが同席するっただけでも、ハードルが高い。

「無理だつてば！ そんな食事会になるなら、行かない！」

思い切り拒否してしまった。でも、知らない男性と食事なんて冗談じゃない。

『結婚のお祝い、してくれるんじゃないの？』

悲しそうな祐子の声を聞いても譲れない。

「するよ！ したいよ！ けど、私と祐子の二人きりか、もしくは旦那さんを含めた三人じゃないや無理！」

これでも、相当な譲歩だ。せっかくのお祝いのこと拒否して悪いけど、本当に無理だから！

それにしても、祐子がこんな風に私に男の人を紹介しようとするなんて初めてだ。私が男性を苦手とわかっている彼女が頼んでくるなんて、なにか事情でもあるのだろうか。

『すごくステキな人だよ！ おすすめなの！』

「おすすめされても、無理なものは無理なの」

『お願い！ 会ってみるだけ。向こうも、お祝いしてくれるって言うてるから、せっかくなら一緒にと思つて』

「別で一席設けてもらつたらいいじゃない。その人だつて、男性が苦手で不審な行動を取っちゃうかもしれない私が一緒じゃないほうが楽しいよ！」

『……ねえ、夕夏。いつまで自分の殻に閉じこもってるつもりなの？ 夕夏は可愛いし、いい子だから、もっと自分に自信を持ちなさい。食事会は、そのきっかけだと思つて』

「祐子……」

感動だ。そんな風に私のことを考えてくれていたなんて嬉しい。でも勇気が出ない。そう考えていたら――

『つまりはアレよ。私の自慢の友達を見せびらかしたいのー！』

……私は見世物みせものパンダか！

祐子は最後、照れ隠しのように言っていたけれど、彼女が心配してくれているのが伝わってきた。だから私も、一步踏み出すことを決意したのだ。

四人で食事をする。ただし、紹介とか、そういうのではなく、あくまでも普通に食事するだけ、と約束して電話を切った。

その後、ベッドに寝そべってあれこれ考える。紹介目的ではなくなったとはいえ、緊張すること

には変わらない。

——当日、どんな格好をしていこう？ お洒落しすぎて、自意識過剰って思われたらどうしよう。ああ、でも、この日のために、すでにお高いワンピースを買ってしまった。ドレスコードのある高級店だから、普段着で行くわけにはいかない。それに、こんな、気合いの入ったワンピース、そうそう着る機会なんてない。

加えて、五桁もする金額の服を着ないままタンスの肥やしにするなんて、もったいなさすぎる。さらに、他に着ていける服が手持ちにあるわけでもない。ワンピースに合わせて選んだアクセサリーと……鞄と……靴と……。使わないまましまっておくのは悲しすぎる。

その夜は、熱が出るんじゃないかというほど悩み、ようやく眠りについたのは明け方だった。



約束の食事会当日の金曜日。

私たちはお店の前で待ち合わせた。

到着した時には祐子だけがいて、いきなり男性がいないことにホッとした。

祐子は私を見た途端、両手を広げて歓声を上げる。

「夕夏！　すごい可愛い！」

——悩みに悩んだ末、結局、予定通りの服装で来た。

祐子が驚くのも無理はない。本当に普段はしないようなお洒落をしてきたのだ。

淡いピンク色のワンピースと、それに合わせて買ったネックレス。肩まである真っ直ぐな黒髪は、下ろしたままにした。そのほうが、ピンクのワンピースの甘さをほどよく抑えられる気がして。こういう色を普段着ないから、気恥ずかしさもあつたのだ。足元は、足首に花のポイントがついたストッキングに、ふちにレースがあしらわれたパンプスを履いている。

「ありがと。そして、おめでとう」

まずはお祝いの言葉とともに、プレゼントを渡した。

「ありがとう」

幸せそうに笑う彼女は、文句なしに可愛い。優しくて社交性がある上に美人なんて、鬼に金棒じゃないか。康司さんが羨ましい。

「そういえば、康司さんは？　一緒じゃないの？」

「友達と来るって言って………、あ、来た！」

その言葉に、ビクンと体が震えてしまった。

——ああ、胃が痛い。

落ち着け、落ち着け、意識する必要はない。

祐子が手を振る先に視線をやると、背の高い二人組の男性がこっちに向かってきていた。

二人とも細身のスーツに身を包んでいる。すらりと背が高くお洒落だ。

遠目にも格好いいのがわかる。

「お待たせ」

間近で見ると彼は、どこぞのファッション雑誌から抜け出てきたようだった。

少し垂れ目気味の優しい顔立ちのほうで、祐子の旦那さんの岸谷康司さん。

もう一人は、康司さんよりもっと背が高く、遅い体つきだ。サイドの毛は無造作にうしろに流し、前髪は軽く上げている。おでこが出ているからか、肌の綺麗さが強調されているなあと思う。少し太めの眉毛と切れ長の目、薄い唇が絶妙に配置されていて、思わずうっとりするほどの整った顔をしていた。

康司さんは「こんばんは」とにこやかに挨拶をするけれど、もう一人は気に入らなそうにこつちを見ているだけだ。

そんな不機嫌な顔さえ絵になる姿を見て——なぜか、すっと肩の力が抜けた。

——あれ？ 私、男の人を前にしても全然緊張していない。

カーッと顔が熱くなったり、緊張から体が強張っているような様子も皆無だ。

不思議に思いながらも導き出した答えは……格好よさが異次元すぎて、緊張する必要もない、と私の頭が判断したんじゃないかってこと。

こんな素敵な男性が、私の人生に関わることなんて絶対にない。そう断言できるから、身構える必要もないと思えた。

——ああ、逆にラクチンだ。

そっかあ。こういう人なら、逆に緊張しないのね。

新発見だ。なんだかすごく楽しくなって、ふふっと笑い声を上げてしまう。

すると、康司さんたちがびっくりしたようにこつちを見たので、失礼なことをしてしまったと気づき、慌てて頭を下げた。

「初めまして。祐子の友人の、田中夕夏です」

場を取り繕うように、康司さんの友達に向かって自己紹介する。ちゃんと目を見て、きちんと挨拶できた。私にしては、奇跡的な出来事だ。

「あー、岩泉隼です。よろしく」

彼は素っ気なくそう言い、ふいと顔を逸らしてしまう。

私は、イケメンは声までイケメンなのね、と場違いなことを考えながら、連れ立って店に入った。いった。

岩泉さんは、最初の不機嫌そうな印象とは一転、席につくと軽く微笑んでくれた。

コーズ料理をあらかじめ頼んでいたため、ドリンクメニューだけを渡される。しかし、横文字ばかりでわからない！戸惑っていると、隣からひよいと手が伸びてきた。

「アルコールは呑める？ 甘めと辛め、どっちが好み？」

岩泉さんは私の好みを聞いて、スマートフォンに注文してくれた。

高級店に慣れていて、女性の扱いにも長けているんだなあと感心すると同時に、ますます自分と

は縁のない相手だと確信し、さらにリラックスできる。

和やかに、思った以上に楽しく食事は進んだ。

その中で祐子と康司さんのなれそめを聞いていると、なんと、新事実がたくさん出てきた。

「え？ 祐子ってば玉の輿に乗ったの!？」

いつもよりも多めにワインを呑んでいた私は、ふわふわしながら尋ねた。康司さんの前で、そんなあけすけなことを言うのはよくないと思いつつも、口が勝手に動いてしまう。

「玉の輿？ そうと言えば、そーだねえ。康司の家は、由緒正しい立派なお家だからねえ」

祐子も酔っているようで、同じようにふわふわした口調の答えが返ってきた。

なんと、祐子ってば、勤めている会社の社長子息を射止めたらしい。

彼女の勤め先は大手総合商社で、康司さんは二十八歳という若さながら将来の社長との呼び声も高い社長子息だという。ロマンス小説みたいな展開だ。

ちなみに康司さんと岩泉さんは同じ会社に勤めており、年齢も同じ幼馴染らしい。

しかも、岩泉さんのお父さんは、その商社の九州支社の社長さんだという。

支社長って言ったって、大手総合商社の支社をまとめているのだ。彼だって、充分御曹司と言える。康司さんとは親同士が友人だったこともあり、小さな頃からよく遊んでいたそうだ。将来は康司さんの右腕となるべく勉強中だという。岩泉さんは謙遜していたけれど、祐子が言うには彼も、確実に副社長の座に就くだろうと、社内で評判らしい。

私には幼い時からずっと一緒に友達なんていないから羨ましい。そして、目標に向かって勉強し

ているなんて、とても格好いいと思う。

思ったことを素直に伝えたら、岩泉さんは照れくさそうに笑った。

家柄がよく、将来も有望で、女性の扱いにも長けていて、背が高くてイケメン。——なんてハイスペック。

祐子が、こんなお方を私の交際相手として紹介しようとしたなんて笑ってしまう。私なんて相手にされるはずもない。どんな女性でも選び放題の人だ。

岩泉さんのことを知れば知るほど警戒心が解けていき、いつも通りに振る舞えた。

あまりにリラックスしすぎて、男性二人はそっちのけでガールズトークに花を咲かせてしまう。

「そっかあ。そういうところへお嫁に行ったら、家のしきたりとか、上流階級の付き合いとかあって、大変なんじゃないの？ それに、嫁いびりもあつたりして。掃除しても『祐子さん、こちらがまだ汚れていてよ!』って、指で埃を取って言われたり」

「いつの時代の話だ！ そんないびりはないよ」

祐子のはんびり手を振るけれど、万が一そんなことがあつた時には助けになりたいと意気込んだ。私は、祐子の手を握って力説する。

「よし、いじわるされたら私に言いなさい。バックが巨大すぎて、多分守ってはやれないけど、匿ってやる！ そうなつたら、私と祐子で愛の逃避行だ！」

「やったあ」

祐子もノリノリで手を握り返してきた。

「やったあじゃないよ……」

康司さんは、手を取り合って誓う私たちの手を引き離して、祐子の手を握り込む。

「愛の逃避行なんて聞き捨てならないな。それに、どこかへ出かけるなら俺も行きたい」

「え〜？ たまには夕夏と二人でも行きたい」

「じゃあ、逃避行って言われるとどこかへ消えちやいそうで心配だから、普通の旅行でお願いします」

康司さんの慌てた様子に、岩泉さんが噴き出す。その後も、岩泉さんが康司さんを小突いては冗談を言っている。二人は気の置けない友人同士という感じで、見ているこちらも楽しくなった。

私だけじゃなくて、テーブルにいるみんなが、この場を楽しんでいる。その雰囲気がとても嬉しくて、私は岩泉さんを見て微笑んだ。彼も同じようにこちらを見て笑ってくれた。

食事もデザートも食べ終わると、康司さんが軽く手を挙げた。

すると、さっと店員さんが来て、銀のトレーに載せられた小さな紙が康司さんの前に差し出される。

あっ……と思って、私は慌てて隣の岩泉さんの服の袖を引っ張った。そして「あの紙、取ってください」とお願いする。私の席からでは手を伸ばしても届かなそうだったので、康司さんの向かいに座る岩泉さんをお願いしたのだ。

彼はチラリと私を見てから、康司さんが確認しようとしていた紙をひよいと取り上げた。

「これ？」

「ありがとう」

私を見下ろして言う彼から、伝票を受け取った。

「ちよっと、夕夏、割り勘だからね」

私の行動を察知した祐子が、釘を刺してくる。

「ダメよ。今日はお祝いなんだから。懐事情により、景気よく全員分……と言えないところが情けないけど、せめて祐子の分は私が払う」

格好悪いけど、正直にそう話した。しかし祐子はなかなか首を縦に振らず、しばらくの間、押し問答することになってしまう。

そんなやり取りをしている間に、岩泉さんが財布から出したカードを銀のトレーに置いて、店員さんに渡していた。

私が驚いて目を見開きながら彼を見ると、視線が合った。

「ここは、全部俺に任せなさい」

くすくすと笑って、私を見ている。

だけど、その言葉に甘えるわけにはいかない。

「初対面の人にご馳走してもらうなんて、できません。そして、お祝いの気持ちなので祐子の分は私が払いたいです」

岩泉さんを見て私が首を横に振ると、彼は驚いた顔をした。

その横で、祐子が嘖き出す。

「夕夏がそう言うなら、奢ってもらおうかな。ご馳走様」

「うんっ」

さすがに、祐子たちの目の前でお金のやりとりをするのはマナーが悪いだろうと、二人を先に店から出るよう促し、あとからこっそり支払った。

会計も済み、店の出口へと向かって歩いて行く。祐子と康司さんが先に行っていたので、岩泉さんの腕をどんと叩いて声をかけた。

「すみません、私が言い出したばかりに」

「え？ なにが？」

彼は目をぱちくりさせて私を見下ろしている。

「支払いです……。私が祐子の分を払うと言い出したから、岩泉さんまで康司さんに食事を奢らなきゃならなくなっちゃって」

本当だったら、言い出しつべの私が全員分払うのがスマートだ。男性同士は、お祝いの席とかで食事を奢ったりしないのかもしれない。

自分のせいで急な出費をさせてしまったかと思うと申し訳なかった。

すると、あまりにも情けない顔をしていたのか、岩泉さんが私の頭をぼんぼんと叩いて慰めてくれる。

「いや、そういうのにまったく気が回っていないなかったから、却って助かったよ。田中さんはプレゼ

ントも用意してたようだし、お財布が厳しくなるのは当然だ。祐子ちゃんが大事そうに持ってたあれ、君があげたんだろ？」

周りのことがよく見えている人だなあ。それに、私に気を遣わせないように、さり気なくフォローしてくれて。

「はい。そう言ってもらえて助かります。実は、プレゼントも張り切りすぎて、予算オーバーしてて」

ほっと息を吐きながら言うと、岩泉さんは楽しそうに笑う。その爽やかな笑顔を見たら、さらに心が軽くなった。

レストランの外に出ると、湿った空気が肌を撫でる。もしかしたら、店にいる間に少し降ったのかもしれない。そう思いながら空を見上げていると――

「夕夏ちゃん、送っていくよ」

康司さんが車のキーをかざしながら言ってくれたけれど、丁重にお断りした。

「そう？ 遠慮しなくてもいいのに。あ、そうだ。連絡先を教えてください。祐子が出た時のために」

さっきお店で話していた、「愛の逃避行」のことを気にしているらしい。祐子にべた惚れな様子に心が温まり、思わず笑みがこぼれる。

「連絡先、いいですよ。でも、役には立たないと思いますよ」

祐子が家出するような事態になれば、私は全面的に彼女の味方だ。居場所を聞かれても、答えることなんてありえない。

言外に含めた意味を正確に捉えたようで、康司さんは苦笑いしている。

「それでも教えてほしい。誤解されて家出つても考えられるからね」

「なるほど。どっちにしても、私のスマホが鳴らないのが一番です」

バッグからスマホを取り出し、自分の電話番号を表示させながらにっこり笑った。

連絡先を交換した後は、祐子たちを駐車場まで送っていくことに。四人で連れ立って、康司さんの車のある場所まで行く。

「夕夏、いろいろありがと！ またね！」

「またね！」

祐子たちの乗った車を見送って振り返ると、岩泉さんが待ち構えたように言った。

「送っていくよ」

康司さんと同じ言葉だ。

——過去の私だったら、自意識過剰にも「もしかしたら、私に好意があるのかな!？」と想想してしまつたところだろう。

でも、腰に手を当てて立つイケメンに言われても、そんな勘違いはまったく起こさない。

ハイスベックでイケメンで、しかも友人の婚約者の友人という私にまで優しいなんて、非の打ちどころがなさすぎる。

彼の気遣いが、なんだかくすぐつたくて、私はくすぐすと笑った。

「ありがとうございます。でも、私の家、ここから近いので、一人でタクシーで帰れます」

彼に、そんな気は遣わなくていいと伝えて、店の近くの道に停まっているタクシーへ向かった。

「うん、じゃあ、タクシーに乗ろうか」

岩泉さんは、ニコニコして言う。

そうして、私が乗り込むより先にタクシーに近づき、運転手になにか話しかけた。

「……うん？ 岩泉さんも一緒に乗るのだろうか。」

ジェントルマンは、一度断られたくらいでは簡単に引かないようだ。女性は、言葉と行動が裏腹な時もあるし、真に受けて送らなくて、怒られた経験があるのかもしれない。でも私は、そんなつもりで言ったわけじゃないから安心してほしい。

「私は本当に一人で平気です。だからどうぞ、お気になさらず」

「うん、わかった」

今度はあっさりと了承してくれたのでホッとする。

開いたドアの横に手を置き、エスコートしてくれたのでそのまま乗り込んだ。

「もう少し、奥へ行ってくれる？」

「え？」

どういうこと？ さっき私が一人で帰ると言った時『わかった』と答えてくれたはずなのに。

「もうちょっと呑みたいんだ。付き合ってくれない？」

「ええつと……」

ふわふわする頭で、どう返事をしようか考えている間に、車のシートと背中の方に手を差し入れられ、奥へ行くよう促された。

「あ、あの……」

もうちよつと付き合うくらいは構わないのだが、私でいいのだろうか。最初は紹介という形で会う約束になっていたから、気を遣って誘ってくれているのではないだろうか。それは申し訳ない。

そんな複雑な思いが脳裏をよぎったけれど、酔った頭では考えがまとまらなくてアタフタしてしまふ。すると、彼は私が帰りの心配をしていると思っただけ、安心させるように言った。

「ああ、ちゃんと最後は家に送ってあげるから」

「は、はい」

「うん」

ニコニコニコニコ。

岩泉さんは、とても楽しそうに笑っている。その笑顔を見たら、少なくとも彼が嫌々誘っているわけではないとわかった。

「ふふっ。もう一軒、行きましょう」

だから、嬉しいなあと思つて私も笑った。

そうして着いたのは、喫茶店のような佇まいのワインバーだった。実際、昼間は喫茶店として営

業しているらしい。店内のあちこちにワインの瓶が飾ってあって、可愛いお店だ。

——誘われるまま呑みにきちゃったけど、本当によかったのかな？

今さらながら、心配になってくる。

そんなことを考えているうちに、カウンター席に通された。岩泉さんと並んで席につく。

「ええと、私は酔っているのでソフトドリンクがいいです」

本格的に酔っている。さつきだって、歩くたびにふわんふわんとしていた。

「そっか。無理強いはいしないけど、あと一杯くらい、サングリアとかどう？ ワインカクテル。おいしいよ？」

アルコールが入っていないものを頼もうとしたのだが、岩泉さんが示したカクテルがものすごくおいしそうで、あと一杯だけ呑むことにした。

「大丈夫。酔いつぶれたら、俺の家に連れて帰って、責任持って介抱するから」

そんな冗談もさらりと言ってしまう彼に、私は免疫がないのだからやめてほしいと思う。だけど、彼は私の事情なんて知るはずもない。必死で平静を装って返事をした。

「そうですか……」

いくら彼を意識してはいないとは言っても、こんな過激なことを言われて平気でいられるわけがない。なにせ私は、男性と付き合ったことなど一度もないのだ。それどころか、二人きりで呑みにきたのだから初である。

酔いとは別の熱さが頬に集まってきたけれど、気がつかないふりをしてメニューを見つめた。

「夕夏ちゃん、俺にも、連絡先教えてくれる？」

注文が終わった後で、岩泉さんがスマホを取り出しながら聞いてきた。

——ん？ 夕夏ちゃん？ さつきの食事会の時は『田中さん』と呼んでいなかったっけ。

急に親しみを込めたような呼び方をされて、ちよつと動揺してしまう。いくら意識するまでもない別世界の相手とはいえ、刺激が強すぎる。

とはいえ、連絡先を聞かれたのは社交辞令だろう。私に恥をかかせないように、聞いてくれるに違いない。

「はあ、いいですけど。そんなに気を遣ってくださいらなくて大丈夫ですよ？」

彼の手元を、ぼんやりと眺めながら答えた。

すると彼は、私が言う番号を登録して、一度電話をかけてきた。

その慣れた手つきから、彼にとってはよくしていることなんだろうと思う。そして、女性に番号を聞いて断られたことなんてないんだろうなあ、とも。

お互いに番号を登録し終わると、岩泉さんがテーブルに片肘をついて、私を覗き込んでくる。

妙に距離が近くて、ぎよつとしてしていると——

「夕夏ちゃん？ 俺のこと、どう思う？」

唐突に、そんなことを聞いてきた。

なんだか、告白する前ふりのようなセリフだ。

というか、女の子に想いを伝えるよう促しているような、「好き」と返ってくるのが当然のよう

な言い方に、少し呆れる。

私もたいがい自意識過剰だが、彼もなかなかの自信家である。とはいえ、これだけあらゆるものが整っているなら、自信家なのも頷ける話だ。

とにかく、彼がドキツとすることを言っても、今はそんな流れじゃない。なにせ相手は私。彼が好意を持つようなタイプの女じゃない。

——うん、大丈夫。口説かれているなんて勘違いしない。

「ハイスベックなイケメンさん」

「ぶはっ」

私が簡潔に答えると、思わずといった感じで噴き出された。

それから岩泉さんは、すごく楽しそうな表情で、内緒話をするように顔を耳元に近づけてくる。

「そのハイスベックなイケメンさんと付き合ってみない？」

——んんんんん？

その時ちようど、サンダリアが運ばれてきた。グラスの縁にカットオレンジを差してあって、とつてもお洒落だ。

気持ちをお洒落させるためにグラスを手に取り、オレンジをぱくんと食べる。それから意を決して、口を開いた。

「んと、ですわ」

「うん？」

岩泉さんは体ごと私のほうを向き、片肘をついて見つめてくる。

「私って、自意識過剰なところがありまして」

相手の真意がわからずドキドキしながらしゃべるより、先に自己申告してしまおうと、口を開く。きつと、岩泉さんはいろいろな女性と接したことがあるだろうし、変に格好をつけて空回るよりマシだと思った。

「へえ」

岩泉さんは、さして驚いた風もなく、そう言った。私を馬鹿にしたような様子のない、彼の優しさがありがたい。

「それでですね、んと、今、もしかして口説かれてる……？　みたいに感じるんですが」
言いながら、やっぱり恥はずかしくて、声が小さくなっていく。

——もう、意識しないで、さらつと言えたらいいのに！

「ああ、してるからね」

そう、こんな風に、さらつと答えられたら。

……？　あれ。

「そっかあ——してる……？」

「そう。俺と付き合ってる？」

思考停止。

五秒。

十秒。

三十秒経過——

岩泉さんの顔を見たまま固まったら、彼がふつと笑った。それから、私の唇についていたオレインジの粒を指で拭ぬわれた——ところで正気に戻って………

「うえええつ、うえええ!？」

大音量で奇声を発してしまっただけど、私は悪くないと思う。

岩泉さんは、私のあまりの声の大きさにびっくりした顔をしてから、にっこり笑った。その笑顔に、はつとして叫んだ。

「からかわないでください！　もう、もうっ………！　私はそういうの、慣れてないんですっ」
慣れてないどころか、初めてだ。

男性から冗談でも告白まがいのことをされたことで、目に涙まで浮かんでくる。

「からかってないけど」

「けど、面白がっているとかなうんでしょ！　もう、もう、もおうっ」

恥ずかしさで頭が回らなくて、「もう」としか言葉が出てこない。

岩泉さんは私を見て、くすくす笑って言った。

「そういう姿が可愛いと思うんだ。いつも隣にいられたらいいなって」

するりと伸びてきた彼の手が、私の髪を一房すくい上げる。

たったそれだけの仕草に、私は固まって動けなくなってしまった。

——『可愛い』。

そんなこと、初めて言われた。ずっと一人で生きていくことを目標にしてきたけど、やっぱり可愛いという言葉は嬉しくて。でも、どんな反応を返せばいいのかわからない。

「あの、あの……っ！」

パニックになって、意味なく手を振り回してしまう。彼は、そんな私を面白そうに眺めながら——

「うん、落ち着こうか」

ぼん、と私の頭を軽く叩き、顔を覗き込んできた。ち、近い！

「は、い………」

切れ長の目が、優しく細められる。間近で見ると、やっぱり格好よくて、頭の中がぐしゃぐしゃになってしまう。しかも、うろたえてうるさくする私を、呆れもせずに微笑んで見守ってくれる。

しばらくは俯いていたけれど、ちらりと視線を向けると、なにも言わずに彼は微笑む。

そんな彼の姿に、じわじわと顔が熱くなってくる。

「ふふ。もつと真っ赤になった。可愛い」

耳を塞ぎたくなるような甘い声で、何度も私を可愛いと言う。

蕩けるようなセリフとともに置かれた、頭の上の大きな掌が気持ちいい。

恥ずかしくていたたまれないのに、頭に手を置かれると妙に落ち着く。顔を覗き込まれて、優しい目で見つめられるたびに、不思議と緊張は解れていった。

私がじっと見つめても、目の前の岩泉さんは、依然として満面の笑みだ。

「ねえ、俺と付き合ってほしいと言ったんだけど、その返事を聞かせてもらえない？ まあ、今日会ったばかりだし、すぐには無理なら、これから考えてほしい」

——本気なの!?

てっきり、イケメンさんのリップサービスかと思ってた！

どうして私なのか、こういう時はどう答えたらいいのか、いろんな疑問が頭の中を通り過ぎていく。またもアタフタし始めた私に、彼は言う。

「あ、オッケーなら、今すぐ返事してくれていいよ？」

オッケーなわけない。たった数分、二人でいるだけで心臓が破裂寸前なのに。

そうだ。よく聞くあのセリフでお茶を濁して……！

「あ、おと……」

……もだから……

「まさか断る気じゃないよね？ それなら、もう少し俺を知ってから判断してほしい」

お友達から、と最後まで言わせてもらえなかった。

さすが百戦錬磨の——かどうかは知らないが——イケメン。ぬかりない。

「それと、お友達からとか、無理だから」

——あつれ〜？ そのフレーズって、告白をお断りする時の常套句なんじゃないのかな？ こう言っておけば万事解決！ の古来より伝わる魔法の言葉じゃなかったっけ？

「だって俺は、夕夏と手をつないで歩きたいし、抱き寄せてもみたい。キスしたりその後も……」

——突然なに言ってるんの、この人!? いきなり紡がれる甘く過激な言葉に、私はぶるぶると首を横に振った。

っていうか、さり気なく『夕夏ちゃん』から呼び捨てに変わってるし！

なにせ私はお付き合い経験ゼロ。同年代の多くの女性が持っているであろうスルースキルも皆無だ。

あまりのことに、なにも言葉が出てこない。ぱつくんぱつくんと口を開け閉めしている間に、頭にあつた彼の手が、するりと頬に落ちてきた。そして親指で唇をたどられ、顎を捕まえられる。

「キス、してみたい？」

「ダメです！」

瞬時に答えた。

今、顔に触れられているのだって、私にとっては初めての経験。この上、キスまでされたら、即気絶したっておかしくない。

岩泉さんは私の答えの早さに驚いた様子で目を丸くして、顎から思わずといったように手を離し——大笑いした。

その後は、必要以上に接近したり過度のスキンシップをされることはなかった。

私がサングリアを呑み終えたところで店を出る。それからまた一緒にタクシーに乗って、私の家の前まで送ってくれた。

アパートの近くの大通り沿いで降ろしてくれたら歩いて帰ると、固辞したけれど——

「夕夏がどんなところに住んでるのか知りたい。……って言ったら、気持ち悪い？」

それまでの自信に満ち溢れた態度から一転、悲しそうな顔で覗き込まれて、思わず首を横に振った。

気持ち悪いってことはないけれど、遠回りすることになるから料金がかさむのが気になる、と言うと、彼はまた満面の笑みを浮かべる。

「そういうの気になるところも可愛い」

タクシーのメーターを気にすることの、どこが可愛いのかさっぱりだ。

……バーで告白まがいのことをされて以来、彼は私が恥ずかしがることしか言わなくなってしまった。彼が私に本気なはずはないとわかっているのに、ドキドキが止まらない。

——結局、アパートの前まで送ると言って、彼は譲ってくれなかった。私は押し切られる形です承した。

アパートの前に着いてタクシーから降りようとしたら、車内に残った彼に手を引かれる。少し体

が傾き、彼と顔が接近した。

「簡単に、家まで送らせたらダメだよ」

耳元でささやかれた——上に、ふっと、息を吹きかけられた。

思わず体が跳ね上がる。慌てて降りると、タクシーはすぐに発進した。岩泉さんはうしろを向き、手を振っている。大きな口を開けて笑いながら。

——お前が言うな——！

真つ赤な顔で、耳を押さえて立ち尽くした状態で、タクシーを見送った。

顔の赤みが引かないまま家に帰って、リビングの真ん中に座り込んでいる現在。

——私の勘違いでなければ、多分だけど、告白、されてしまった……

去り際に見た彼は、かなり笑っていた。やっぱり冗談だったのだろうか。男性に免疫めんえきのなさそうな私の反応が新鮮で、ちょっとからかってみただけとか……

うん、やっぱり冗談だ。また自意識過剰にも勘違いするところだった。

——彼は、私がおささきお付き合ひを受けると言ったらどうしたのだろうか。その場ですぐに「冗談だって」と否定した？ それとも、とりあえずお付き合ひを始めるけれど、彼が飽きたらすぐに捨てられた……？ いずれにしても、申し出を受けたら傷付くことになりそう。

そう思うのに、彼の優しい笑顔や、低い声でささやかれた甘いセリフが蘇よみがえってきて頭から離れない。さつきからずっと、思い出しては身悶みもたえる、というのを繰り返している。どうしたらいいん

だろうか？

格好いいのはもちろんだけど、私がメニューに悩んだり返答に困ったりした時のさりげない優しさに、胸がときめいてしまった。自分が彼の特別になったような気がして。

——自意識過剰と言われるのが怖くて、ずっとずっと封じ込めていた気持ちを、自然と引き出されてしまった。とはいえ、この想いに身を任せて行動することはできない。もしも彼に冷たく拒絶されたら、それこそ立ち直れなくなってしまういそうだから。

——うん、やっぱり考えるのはやめよう。

私は、彼の笑顔を思い浮かべて強く首を横に振った。

彼に恋をしても無駄だし、向こうも私をからかったただけだ。

無理矢理自分を納得させようとしているのに、彼に触れられた髪や頬ほが熱を持っていて、余計に意識してしまう。

ふいに、タクシーを降りる時の彼を思い出す。

——耳に息を吹きかけるとか！

あんなイタズラ、小学生の頃にされて以来なんですけど！ 大人もやるんですね！ いや、むしろ大人の高等恋愛テクニクですか!? 現に私は、体の芯しんがゾクゾクするような変な感覚があつて、余計に意識しちゃってますから！

……………

あああああ。

岩泉さんの恋愛観は、ハイレベルすぎてついていけません。そんなことを考えながら、さらに一人で身悶えみまた続けていた。その時、スマホがメールの着信を伝える。頭を切り替えるつもりで、すぐにメールチェックをした。『今帰ったよ。ただいま。次はいつ会える？』送り主は、もちろん岩泉さん。思いもかけないメールに、頭が沸騰して、私の許容量を超えた。

2

次の日から、岩泉さんの甘いメール攻撃が始まった。

本気かどうかは別としても、好意を向けてくれているのだから、「攻撃」という言葉はふさわしくないのかもしれない。しかし、私にとっては攻撃に他ならないのだ。

『食事会、楽しかったね』

『あの日はすごく可愛かった』

『また会いたい』

と、どこのドラマのセリフですか、と思うようなものが次々に送られてくる。

私は自分のことを自意識過剰だと思っているが、彼もたいがい自意識過剰だ。

私だったら、こんなことを送って引かれないかな？ と気になって仕方ないだろう。あの容姿と

性格ならば、自信があつて当然かもしれないけれど、そういうのを恐れない心の強さを尊敬する。

だからと言って、彼の誘いに乗ることはできず、『ごめんなさい。会えません』と送った。

しかし、それで引き下がる彼ではない。

『忙しいみたいだね。いつなら会える？』

と、すぐさま返事がくる。

——昨日も一昨日おとといも、夜九時過ぎにメールがきた。

現在の時刻は八時。この三日の経験から、私は少し……少しだけ、メールがくるのを期待していた。

毎回『ありがとうございます』とか『ごめんなさい』とか工夫のない返事しかできないくせに、自分勝手なのはわかっている。

連日届く甘いメールを見るたびに、彼は本当に私を可愛いと思ってくれているのかもしれないと期待しそうになっている自分がいる。

——だけど、もし。もしも私とその気になって応じたら……

『え、本気にしてたの？ 俺が君相手に真剣交際しようと思うとでも？ どんだけ自分に自信があるんだよ』

そんなことを言われる自分が、容易に想像できる。

誰かを好きになって、その想いを表現するのが怖い。

もし彼に冷たく突き放されたら、真に受けてその気になったことが恥はずかしくて、自己嫌悪じこげんおで、もう人前ひとまへに出ることさえできなくなってしまうかもしれない。

リビングで座り、そんなことをグルグルと考えていた私は、もう一度、時間を見る。さつきから、まだ五分も経っていない。

ため息を吐いて、自分はどれだけ彼からの連絡を楽しみにしているのかと自嘲じじょう気味に笑った時だった。

ルルルルル……ルルルルル……

スマホが着信を知らせる。この音は、メールじゃなくて電話だ。

ということは、お目当ての連絡ではないと、がっかりしながら確認したら――

画面に表示されていた名前は、「岩泉さん」。

「えっ、なんで!？」

思わず声を出してスマホを持ち上げた。

「は、はいっ……!」

『もしもし? こんにちは』

「こっ………こんにちは。田中、です」

わかっているよと言われそうだと思いながら名乗ったところ、彼はくすくすと笑いながら『岩泉です』と言った。

『声が聞きたくて。今、大丈夫?』

初はつ端たんから甘く気障きざなことを言われて、私は固まる。

声が聞きたいって、そんなにさらりと言ってしまうのですか!?

「きよっ、今日は早めに仕事が終わったから、もう家で……」

慌てふためいて返答をする。

ドキドキと胸が高鳴って、スマホを握にぎる自分の手に力が入った。

岩泉さんは、『本当は昨日も一昨日おととも電話したかったけど、遅くまで休日出勤してたからかけなかった』と言う。

「お仕事、お疲れ様です」

そんなありきたりな言葉しかかけられない、自分の語彙ごごいの少なさに落ち込む。けれど、そんな私の返答を気にする様子もなく、彼は『ありがとう』と電話口で笑っているようだった。

『できるなら、毎日でも電話して声を聞きたいけど、夜遅くにかけるのは迷惑だと思って』

いや、時間の問題じゃない。いちいち甘すぎるセリフをささやかれることに困っているんだけど!!

「毎日なんて……絶対に無理です!!」

そんなことされたら、心臓が破裂する。

『ふーん……じゃあ、毎日じゃなきゃ、いいってこと?』

「いえ、その、あう……」

電話しながら、ふと部屋の隅に置かれているドレッサーの鏡が目に入った。両手でスマホを握にぎっ

て必死で耳に押し当ててている私が映っている。顔は真っ赤だ。

ますますいたたまれなくなり、うまく言葉を紡げなくなっていく。

そんな私の様子を察知しているらしい彼は、終始笑いながらも、しどろもどろで話す私を優しく待ってくれた。

『——また電話する』

「はい。おやすみなさい」

そう言っただけ、電話は切れた。

時計を見ると、八時十五分。十分ほどの短い時間の会話。

だけど、私は彼の声を聞いている間中ドキドキして、緊張して、胸がキューツとなるような感覚を味わっていた。

ぼすんとクツションに顔を埋め、独り言をつぶやく。

「毎日は、死ぬ……」



翌日から、私の希望通り、毎日の電話は免れた。ただし、まったくないというわけではなく、二、三日に一度は電話があり、それ以外の日はメールがくる。私の要望を聞き入れつつも、連絡は欠かさない。マメな人だなあと思う。

ここ二週間ほどは、そんなペースで連絡を取っていた。

そんなに何度も電話で話していれば、さすがに少しは慣れる。今日かかってきた電話で、すでに五回目だ。

『それで、取引先の相手の名前間違えてさ——』

ちょうど今は、仕事でのドジな失敗談を聞かせてくれていた。私はそれを、クスクスと笑いながら聞いている。

岩泉さんは営業さんらしく、話題が豊富だ。彼の話はいつも面白くて、自然と自分がリラックスできているのを感じる。

「岩泉さんでもそんな失敗するんですね。祐子も、康司さんが——」

そう言った時、突然彼が『あ！』と大きな声を上げた。

「どうしたんですか？」

『康司のことは名前呼びなのに、俺のことはなんで隼って呼んでくれないの？』

……なにを言い出すかと思えば。

「祐子と同じ名字になるからですよ……」

二人とも岸谷さんだ。名前呼びになるのは仕方がない。

『なんで。ズルいだろう!? 俺も隼って呼ばれたい。それに、敬語もやめてほしい』

「む、無理です」

こうやって電話をしていることに慣れたのも、自分的には快挙だと思う。なのに、さらに名前呼

びとタメ口だなんて。

その返答が、彼は気に入らなかつたようである——

『だったら、康司のことも岸谷さんって呼んで。康司に嫉妬するから』と、拗ねたように言われた。

その口調がなんだか可愛くて、私は思わず子供を宥めるような気持ちになって了承してしまった。

「ふふっ。わかりました。……えと、隼、さんの希望に沿えるように、頑張る……」

……やっぱ無理！

言っている途中で恥ずかしさが湧き上がってきて、前言撤回しようとしたら——

『可愛い！』

嬉しそうな叫び声が聞こえてくる。私は羞恥に耐えられなくなり、「おやすみなさいっ」と言つてすぐさま電話を切つた。

3

夕夏との電話を切つた俺——岩泉隼は、座っていたベッドへと仰向けに倒れた。

「ああ、うまくいかねえ」

ついで、そんな言葉が口をつく。

康司の結婚を祝う食事会で初めて会ってから二週間。毎日欠かさず連絡し、必死で口説いているのに、まったく手応えがない。ハッキリ言つて、こんなことは生まれて初めての経験。もっとも、最初の頃に比べれば、大分距離が縮まったと思うが。

——こんなにハマるなんて想定外だ。

そもそも、最初に『紹介したい子がいる』と言われた時には、嫌悪感すら抱いていたほどである。

「どうしたら、俺の本気が伝わるんだ……」

ぼんやりと天井を見つめ、康司に誘いを受けた日のことを思い出す——

年度始めの忙しさもようやく落ち着いてきた頃。

仕事が終わって机で伸びをしている時に、一人の男が近づいてきた。

「隼、飯食に行かぬ？」

そう言ったのは、岸谷康司——俺たちが働いている KISHITANI 総合商社の創業者一族であり、社長令息だ。今時、同族経営でもないのに、将来的に奴が必ず社長になるとは決まっていな。しかし康司は、その席がほしいと努力を続けている。そして、徐々にではあるが康司はその手腕を認められつつあった。

将来有望な御曹司と俺が、なぜこんな気安い関係かという点、幼馴染だから。親同士の仲が良く、小学校から大学まで、ずっと同じだった。

俺たちは折に触れ、この巨大な企業を我が手で動かしていきたいと語り合ってきた。そして今は

康司が営業一課課長、俺は係長という役割を得ている。

そんな康司は、つい最近、総務課の田中祐子ちゃんとの結婚が決まったばかり。こいつのほうがベタ惚れで、彼女と付き合い始めてからは、まったく誘いもなかった。突然、食事に誘ってくるなんて珍しい。俺は不思議に思いながら視線を上げた。

「今からか？」

もう帰り支度ができるから俺は大丈夫だが、康司のほうは結婚式の準備などで忙しいと聞いている。

「ああ、違う。今日じゃなくて、近いうちに。結婚前に祐子が、お前と一緒に食事に行きたいって言い出して」

彼氏の友達と食事に行つて、なにが楽しいんだ？

「で、祐子がお前に紹介したい子がいるんだと」

——その言葉を聞いた瞬間、自分の顔が歪んだのがわかった。

誰かの紹介で、女と会うのは大嫌いだ。

こっちにその気がなくても、俺の情報はダダ漏れで、いつの間にか自宅まで知られて待ち伏せされたこともある。

そんな恐ろしい目に遭うくらいなら、街で声を掛けてきた子と遊ぶほうが楽だ。

「そんな顔すんなつて。すっげ、いい子だよ。俺の彼女の太鼓判」

祐子ちゃんはいいい子だと思うが、その友達もそうとは限らない。

どうせ、祐子ちゃんが康司と結婚して玉の輿に乗ると知り、自分にも誰か紹介しろと言ってきたんだろ？

この上なく面倒くさい。

そんな女が、いい子なわけない。

「絶対嫌だ」

そう言われるのがわかっていたというように、康司は苦笑いしている。

「俺も何度か会ったことある子で、お前と合うと思っただけだな」

そんなことをつぶやく康司を放つて、俺はさっさとオフィスを出た。

だからそこで、その話は終わった——はずだった。

「隼、悪い。一昨日の話は忘れてくれ」

昼休み、休憩室にいたら康司が現れた。わざわざ缶コーヒーを持ってきて、それを俺に渡してくる。お詫びの品だとしても言いたいのか。

「あ？」

「紹介したい子がいるつて話だよ」

康司は申し訳なさそうにしているが、別に構わない。そもそも俺は、最初から会いたくなかった。「断つただろ」

眉をひそめて言うと、康司は残念そうにため息を吐いた。

「……なら、いいか。実は向こうからも断られて」

——はあ？ 向こうが紹介しろって言ってきたんじゃないのか。

康司にそう尋ねると、このカップルの独断だったことが判明した。

それで、向こうにも話したら、相手も断ってきたのだという。

勝手に俺がフラれたみたいな状態になり、釈然としなない。大きな不満を抱きつつ、康司が持ってきたコーヒートのプルタブを開ける。

「だから、紹介の席ではなく、二人に結婚のお祝いをしてもらう席になった」

缶に口を付けようとした時に驚きの言葉を告げられ、横に突っ立っている康司を見る。

「はあああ？」

俺の声が大きくて、他の休憩している社員が振り返った。

——確かに、幼馴染とはいえ、仮にも上司に使う言葉じゃない。

だが、今は言わせてもらいたい。それ、ただの屁理屈じゃね!? 結局、会うことに変わりないのだから。

……もしかしたら、紹介という形で会うより、共通の友人の祝いの席としたほうが体裁がいいとかなんとか、相手の女と祐子ちゃんが画策したのかも。

——この時の俺は、これまで散々、女の面倒事に巻き込まれてきたため、警戒心の塊だった。

しかし、そんな俺の心情など、どこ吹く風な康司は、呑気に話を続ける。

「というわけで、来週の金曜日、食事に付き合ってください」

言われて、天を仰いだ。

ダメだ。康司はもう、恋人に惚れすぎて頭のネジが緩みきってるからあてにならない。

深いため息を一つ吐いて、仕方がないからOKの返事をした。

そして迎えた金曜日。当日は、仕事帰りにそのまま店に向かうことに。康司が車を出してくれると言うから、ありがたく同乗させてもらった。祐子ちゃんは先に行っているらしい。

『今日は祐子が呑むから、俺は車係なんだ』と、嬉しそうに話す康司。女のために、あれこれしたなんて気持ち、俺には理解できない。

レストランに着くと、店の前に二人組の女性が立っていた。

祐子ちゃんの横にいた彼女は、緊張した様子だ。

淡い色のすっきりしたワンピースが、白く柔らかそうな肌を際立たせていた。

派手さはないけれど、抱き心地がよさそうで悪い感じはしない……なんて、つい不埒なことを考えてしまう。

男を紹介してほしいとごり押しするような感じではないが、見た目じゃわからないからな。

——自分の見た目とか、環境だとかが女受けすることは知っている。父親が大手総合商社のそれなりのポストに就いていることもあり、裕福な家庭で育ったという自覚もある。その辺りの事情も、祐子ちゃんから聞いて知っているのかもしれない。

嫌悪感も露わに不躰な視線を向ける。彼女は不思議そうに俺を見上げていた。こんな無邪気そう

な顔をして、内心ではあざとく計算しているかと思うと、さらに厄介な女だ。

——近くで見た彼女は、うん、まあ、好みだったけれど。

俺は、そんな気持ちなどおくびにも出さず、ますます不機嫌さを丸出しにした態度を取った。

しかし次の瞬間——彼女は、ふふっと、笑い声をこぼした。

ホッとして、思わず笑ってしまったという様子だ。

——なぜだ？ 意味がわからない。

ビックリしていると、彼女は慌てたように自己紹介してきた。

——やばい、可愛い。

そう、彼女は俺の好みのタイプだ。地味で優しそうな雰囲気、柔らかそうな子が好きなのである。

しかし、大体、自分の好みの子は、俺のことを好きにはならない。軽くモーションをかけても、この見た目が緊張すると言って敬遠されてしまう。寄ってくるのは、ステータス大好きな派手好きの女ばかりで、好みの子と付き合ったことはなかった。

だからもしかすると、この出会いは俺にとってもチャンスかもしれない。

——う〜ん、この子になら、ちよつとくらい近寄られてもいいかな〜。

高飛車にも、そう考えていた俺は、この後、非常に苦勞することになるのだった。

食事を始めて、早一時間。

……本気で、結婚祝いの席だった。

席こそ隣同士で座っているが、俺たちの間に会話はほぼない。彼女は、康司と祐子ちゃんのなれそめを聞きたがり、新居の話などで盛り上がっている。話の流れ上、俺のことが出てくる場合もあるが、そこから会話を広げて探りを入れてくる、ということは皆無だった。最初は、恥ずかしがつて自分からは話せないのかとも思ったが、祐子ちゃんも俺たちの仲を取り持とうという雰囲気じゃない。

考えていたような状況ではない上に、康司が社長令息だということさえ初めて知ったようで、非常に驚いていた。

そして、家柄の良い家に嫁ぐことになった友人を羨むのではなく、苦勞しないのかと心配していた。

祐子ちゃんが玉の輿に乗ったことは、二人にとって重要ではないらしい。

——いや、俺が想像していたのとは別の理由では重要そうだった。

もし嫁いびりなどに遭い、辛い時にはいつでも助けると盛り上がっている。いざとなったら、二人でどこかへ逃げようとかなんとか話して、康司を敵に回していた。

そんな二人の様子を見て、康司は必死で祐子ちゃんの手を握って引き留めている。うろたえる康司の姿に、笑いが止まらなかった。

こうして、思った以上に楽しい食事が終わり、会計の時。

俺はすっかり彼女を見直し、もつと話してみたい気持ちになっていた。康司たちと別れたら、こ

の後どこかに誘って……と考えていると、横からつんと服を引っ張られる。

「あの紙、取ってください」

こちらに体を寄せてきた彼女が、俺の向かいの席に座る康司が手に取るうとしている伝票がほし
いと言ってきた。

彼女との距離が急に近くなったことにドキドキして、なにも考えないままに伝票を渡す。

なんと彼女は、この食事代を自分で払うつもりだった。しかも、祐子ちゃんの分も。

今、彼女が社長令息に嫁ぐという話を聞いたばかりだというのに。奢ってもらおうとか、そうい
う発想はないのか。

——ああ。

今まで会ってきた女性とは、まったく違う。俺は、嬉しそうに財布を握りしめる彼女に見惚れた。
その後、俺が全員分払うとも申し出たが、彼女は譲らず、お互いにそれぞれの友人の分を持つこ
とに。

この頃には、すっかり彼女のが気になっていたので、むしろ払わせてほしいと思っていたの
だが、『初対面の人に「馳走してもらうなんて、できません』と他人行儀に断られ、秘かに落ち込
んだくらいだった。

こうして支払いを済ませて店の外に出たところで、車を示しながら康司が言った。

「夕夏ちゃん、送っていくよ」

——おい、やめろ。お前は祐子ちゃんと二人で、さっさと帰れ。

怨念を込めて睨み付ける。そんな俺をおもしろそうに眺めながら、康司は帰っていった。

レストランで、祐子ちゃんにあしらわれている康司を見て、ずっと笑っていた仕返しか！

俺が彼女を気に入ったとわかっていて、嫌がらせしたに違いない。これから口説こうと思ってい
るのに、帰られたらたまらない。勝負はこれからだ。

そんな俺の想いなど露知らず、彼女は康司たちを見送った後、明らかに自分も帰ろうとしていた。
——いやいやいや。

自分でも驚くほど内心慌てていた。

「送っていくよ」

そう言うのに、彼女は一人でタクシーで帰ると言う。

——もうわかった。

いや、もうずいぶん前からわかってはいたけれど、彼女が紹介を断ったというのはマジだ。

今日、この場に來たのは、祐子ちゃんにおめでとうを言いたかっただけ。

さらには、俺にはまったく興味がございません。

……思った以上にシヨックだった。

一緒に食事して、それなりに楽しくて、二人きりになれば、もう少し一緒にいたいとかさあ、あ
るだろ？

それなのに彼女は『私は本当に一人で平気です。だからどうぞ、お気になさらず』なんて言い、

口説いていることにすら気づかない。経験したことのない情けない状況に陥り、涙が出てきそうだった。

——その後は、半分意地になって、呑み直そうと言って一緒にタクシーに乗り込み、次のお店へと誘った。

二軒目のバーでの様子も予想外のもので、俺はますます彼女にハマり、必死で口説いて口説いて……いつの間にか本気になっていて。

毎日のようにメールや電話をするようになったけど、彼女はなかなか自分の言葉を信じてくれない。

こうして俺の、夕夏に常時愛をささやく日々は始まったのだった。



夕夏と出会って一か月半が経った頃。

昼休憩に入り、呑気に自分のデスクで弁当を開けようとしていた康司に声をかける。

俺はかなり苛立っていた。

「おい」

「あ、これ？ もちろん、愛妻べんと……」

「聞いてねえよ！」

というか、何度も聞いたからもういいよ！

『料理はあまり得意じゃないけど、旦那様にお弁当を作るのが夢だったから頑張る』とか言うんだ。段々上手になってきて、最近はもう、すっげ、うまいんだよ。俺って幸せだろ！』ってどこまで、何度も！

「イラついてんな。飯でも食えよ。俺の弁当はやらんが」

「いらねえよ。——会ってくれないんだよ」

「夕夏ちゃんがか？ ……嫌われてんじゃね？」

——ぶっとばす。

俺の本気のイラつきを感じたのか、康司は気を取り直した様子で、ようやく弁当から視線を離してこっちを向いた。

「あー……、彼女とは、あれから会ったの？」

ようやく話を聞いてくれる気になった友人に、ため息を吐きながら首を横に振って応えた。

結婚祝いの食事会の翌週は、自分でも機嫌がよかったと思う。月曜に康司に会った時には、いい子だった、上手くいきそうかも、なんて話していた。恥ずかしがってはいたけれど、嫌がられていた様子はなかったから。

——一緒にいて、あんなに安らげる子は初めてだった。もっと一緒にいたいと思ったのだ。次の日もメールをしたし、その後も、早めに帰れた日には夜に電話で話したりもしている。

電話はあまり得意ではないようで、かけるといつもあたふたしているのが声から伝わってくる。それを可愛いと言くと、『もう無理です！』とすぐに、切られてしまうのだけど。

彼女はまったく男慣れしていない様子だったので、徐々に距離を縮めていけば、いつかは振り向かせられる……そう思っていた。

しかし、休日と一緒に出かけようと誘うと、決まって断られるのだ。

電話の声は嫌がついていないし、楽しそうにしているように思える。

三日に一度のペースでかけているので、段々慣れて、彼女が自分から話すことも増えてきた。

メールをすれば、返信までの時間にばらつきはあるものの、必ず返事はくる。遅くなった時は、『気づかなかった。ごめんね』という、可愛い一言入りで。

——だというのに、だ。

いつ誘っても断られる。

休みの日は都合が悪いのかと、平日の夕食にも誘った。

それも断られた。

しかも毎回、嫌そうにというより、申し訳なさそうに断るので、なんとなく理由を聞けない。こうして俺は、会ってもらえない理由を聞くこともできないへタレと化していたのだ。

「聞けよ」

康司が突っ込んでくるが無視する。

「お前が誰かと、そんな頻繁に連絡を取るなんて、珍しいな。というか、お前ってプライベートで

メール使うのか!？」

康司が不思議そうに聞いてくるが、これも無視をする。

——自分でも驚いているのだ。

しかし、康司が驚くのも無理はない。俺は仕事以外でメールを、ほぼ使わない。打つのが面倒だからだ。用事があるなら電話で言えばいい。そのほうが早い。

ついでに、用事もないのに電話するなんてこともしたことがなかった。

いや、俺的には今も、用事もなく電話しているつもりはない。夕夏の声を聞く、という用事があつてかけているのだから。だが、そんな理由、ひと月前の自分が聞いたら「そんなの用事じゃねーよ」と一蹴したことだろう。

——こんな風に、すっかり俺は変わってしまった。自分でも信じられないくらいである。

夕夏の声が聞きたい。顔が見たい。会いたい。

そう思って今週も誘ったが、また断られたのだ。

「なぜだと思う？」

「俺に聞いても知らねえよ。直接夕夏ちゃんに聞けばいいだろう？」

康司が呆れ顔で弁当を食べようとした時、背後から声がかかった。

「あの、岩泉係長」

振り向くと、書類を持った女性社員が顔を赤くして立っていた。

「これ、企画書です。私、係長に見ていただきましたたくって……」

「わかった。机に置いておいて。わざわざ持つてこなくていいから」
女性社員の言葉を遮って、俺の机を指さした。

彼女は一瞬、残念そうな顔をして、さらになにか言おうとする。俺は手を振って止めた。

「今は昼休みだよな？ 食事時間削って仕事するのは立派だけど、効率を考えて。それにこれは、急ぎの案件でもなかったら？」

彼女はぐつと言葉に詰まった後、小さく返事をして離れていった。

——今みたいに、俺と康司が雑談していると、大体誰かが話しかけてくるのだ。俺たちの雑談に入れてもらおうと考えるかのように。

さっきの女性が持ってきた企画書も、本来は直接俺に提出するのではなく、チーフを通して上がってくるべきものだ。

本当に鬱陶しい。

「ああ、これが本来の隼だよなあ」

妙に感心したように康司が言ったが、そんなことに構っている場合じゃない。

「会いたいんだ」

俺が言うと、康司は首を傾げる。

「会って欲しくないんだろ？」

「だからお前に、どうにかしてくれと頼んでいるんだ！ 紹介した者の責任として、最後まで面倒見てくれ！」

うわあ……、という顔をされたが、気にしてられない。

「こんだけ誘って、会って欲しくないとか、あとどうすればいいんだ。待ち伏せか？ ストーリーか？」

「待って待って。わかった。祐子に探りを入れてもらう。犯罪はやめてくれ。会社の評判に関わる」
もちろん、俺としてもストーリーをしたくないわけじゃない。

友人に仲を取り持つてもらうなんて格好悪いにもほどがあるが、背に腹は替えられない。

——有力な協力者を得て、これで一步前進かと期待していた。

しかし、その道のりがまだまだ長いことを、この時の俺は知らない……

仕事を終えた俺は、康司たちのお宅にお邪魔した。

二人とも残業したので、祐子ちゃんは先に帰宅しているという。

時刻はもう八時過ぎ。いつもだったら夕夏との電話タイムにあてている時間だが、今日は仕方がない。

「岩泉さん、いらっしやい」

不思議そうな顔で祐子ちゃんが出迎えてくれた。今晚俺がお邪魔することは伝えてあったようだが、詳しい事情は話していないらしい。

「悪い。こんな遅くに」

今が一番楽しいような時期のラブラブカップルの家を、急に訪ねるのは申し訳ない。

「いいけど、どうしたの？」

祐子ちゃんは、俺が今日訪ねてきた理由が、まるで見当もつかない様子。俺はため息を吐きたくなかった。

つまり夕夏は、祐子ちゃんに俺とのことをなにも話していないのだろうか。

……それは、俺のことがまったく眼中がんちゅうにないということか。

「夕夏ちゃんにフラれ続けてるんだと」

三人でリビングへと向かいながら、康司が余計なことを言う。

——フラれてない。断られ続けているだけだ！

いつもの祐子ちゃんだったら、「夕夏、口説かれてるの!? うっそお」とか、テンションの高い反応が返ってくると思っていたのに、「ああ……ダメだった?」という悲しそうな表情が返ってきた。

祐子ちゃんの反応に俺が戸惑った表情を見せると、彼女は困ったように視線を揺らした。

「自分も詳しく聞いたわけではないし、人に話していい内容かもわからないのだけど」

祐子ちゃんはその前置きをして、夕夏が『自意識過剰』であることを非常に気にしているのだと教えてくれた。

「夕夏ね、人の視線をすごく怖がるの。人にどう思われているかをすごく気にする。私が知り合った大学の頃にはすでにそうだったから、もしかするとそれ以前になにか嫌な思いをしたことがあるのかも」

「自意識過剰……」

そういえば、二人でバーに行った時にも、夕夏はそんなことを言っていた。

「私は、そんなに他人の目を気にする必要はないと思うの。第一、夕夏のことを自意識過剰だとも思わないし。でもあの子は私がいくらそう言っても、なかなか自分の殻の中から出てこない。だったら、夕夏が思わず見惚みとれて視線を独占みとされちゃうような人を隣に置いてみたら、外に出られるんじゃないかと思っただけ……」

祐子ちゃんが苦笑いしながらいったん言葉を区切った後、「荒療治だったね」とつぶやいた。

「つまり、俺が腕の中に囲って、外を見られなくすればいいんだろ? そうすれば夕夏は、自分の殻から外に出ても怖くない」

連日誘いを断られている状況で言えたことではないが、俺とは別になにか理由がありそうだと知り、少し安心した。失いつつあった自信を取り戻し、ますます彼女がほしくて仕方なくなる。

——俺の手で、彼女を変えたい。

ゆくゆくは自信をつけて前を向けるようになったほうがいいと思うが、まずは一緒に外の世界に出てほしい。他を気にする暇もないくらい、俺に夢中になればいい。

にやりと笑う俺を見て、祐子ちゃんは驚いた顔をして噴き出す。そして、いい考えだと言うように頷うなずき、いつもの笑顔を見せた。

「そうね。そうしてくれる?」

そう言って、彼女はスマホを持ち上げた。

私が隼さんと、電話やメールでのやり取りをするようになって、もう一か月半が過ぎた。名前で呼ぶことにもなんとか慣れて、最近、隼さんからの電話を待っている自分がいる。

時刻はもう夜の八時半。電話がある時はたいがい八時までにあるから、今日はもうかかつてこない可能性が高い。二時間近くおしゃべりする日もあるため、夕食も入浴も先に済ませて、秘かに待っているだけだな……少し残念に思いながらのんびりしていると、スマホが震えた。

すぐに画面を見ると、「祐子」の文字。表示された名前に、思わずがっかりしてしまう。

——いやいやいや、祐子から電話がかかってきてがっかりとかないし！
気を取り直して、スマホを取る。

「はい。どうしたの？」

電話に出た途端、大声で聞かれた。

『夕夏、口説かれてるってホント？』

ぐおほっ。

思わず、むせた。

『夕夏、大丈夫？ どうしたの？』

「けほっ、や、大丈夫。むせただけ。っというか、なにそれ。どこ情報？」

『康司』

ですよね！ その人しかいませんね！

——でも、意外だった。

なんとなく、隼さんは女性関係とかを、友人に話したりするタイプではないと思っていたから。

『で、会ってあげないんだって？ 岩泉さんが悩んでたらしいよ』

祐子は明らかに面白がっている。

「隼さんが、そんなことで悩むはずないでしょ。ただ……会う必要ないかなって思って」

というか、会ったらダメな気がする。

会えば私は、彼を好きにならない自信がない。そして、好きになってももらえる自信はもつとない。電話やメールのたびに可愛いと言ってくれるのは、単なるお世辞だ。それを真に受けて本気になるのは危険だ。私だって、身の程はわきまえている。

『え〜？ 会うの、嫌なの？』

ストレートな祐子の問いに、言葉が詰まる。

「え、いや……嫌というわけでは……」

『夕夏も会いたいんじゃない〜〜!!』

きやあああ!!

電話の向こうから、歓喜の叫びが聞こえる。

「ちよっ……！ そんなこと言っていないでしょ!？」

『なに言ってるの！ 夕夏がきつぱり会いたくないって言わなかったのよ？ それも男に！ 赤飯ものよ!』

——確かに。と、思ってしまったことは内緒だ。

『で？ なんで会ってあげないの?』

鋭い質問に、ぐっと、言葉に詰まって、誰もいないのに、きよろきよると辺りを確認してしまう。顔に熱が集まってきて、すでに真っ赤であると、鏡を見なくてもわかる。

電話の向こうは黙ったまま。

答えを言うまで、このまま待つ姿勢だ。

「……………恥ずかしいから」

『なんじゃそら』

——ですよね！

「恥ずかしいんだよ、あの人！ すぐ可愛いとか、気障なことも言うし、あと、あと……!」

必死で言葉を紡いでいると、電話の向こうで『ちよっとかわって』という男の人の声が聞こえて——

『あと?』

祐子からかわって、隼さんが出た。

「……………っ!？」

思わず息を吞んで、そのまま通話終了ボタンを押してしまう。

——どうしてどうしてどうして、隼さんがっ!？」

私の言葉、どこまで聞かれてしまったんだろう。私はなにをしゃべったっけ？

また震え始めるスマホを床に放り投げて、もう寝てしまおうと思った。

歯を磨いて、トイレに行つて戻つてきても、まだ震え続けていたスマホ。私はそれを見ないふりして、ベッドに潜り込んだ。

——とはいえ、無視し続けるにも限度がある。

スマホは、かれこれ三十分ほど震え続けている。画面にはもちろん、発信者を伝える「岩泉さん」の文字。

いい加減、このまま放っておくわけにはいかない。でも、恥ずかしくて話すことなんてできそうにない。

——さっきの祐子との話を聞いて、彼はどう思っただろう。

会話を聞かれていなかったとしても、話のいきさつを祐子から聞いてはいるだろう。

会いたいと思ひながら彼を避けて、気のあるそぶりを見せながら会う気のない私は、彼の目には悪女のように映っているのかもしれない。

そんな風に誤解されるのは悲しいけれど、自分が時いた種だ。

さらにしばらくの間、ベッドの中から震え続けるスマホをぼんやりと眺める。すると、あんなに切れては震えてを繰り返していたスマホが沈黙した。

——もう彼は、諦めてしまったのだろうか。

——ずくと身勝手にも胸が痛む。

無視していたのは自分。なのに、諦められるのも辛いだなんて、どうすればいいんだという話だ。泣きそうになって、大きく息を吸い込んだけれど、却って涙がにじんできてしまった。

そこに、玄関のチャイムが鳴った。

——ん？

もう一度鳴った。

時計は九時をとくに回っている。こんな時間に訪ねて来る人とは……？

いや、そんなまさか。

一瞬、期待を込めて、ある人物が思い浮かんだけど、すぐに打ち消した。すると次の瞬間——どん、とドアを拳で叩く音が。

「開ける」

「ごっ……強盗ですか!？」

外から聞こえてきた隼さんの声に、思わず、可愛げないことを叫んでしまう。ビックリしたけど、嫌だとか怖いだとかは思っていない。

「近いものがあるが、隼だ。開ける」

どうやら私の叫びは聞こえていたらしい。

慌ててドアの傍まで駆けていって——どんな顔をして会えばよいのだと、足が止まった。震えるほど喜んでいる自分を感じているのに、同じくらい怖がっている自分もいる。

しばらく躊躇っていたら、今度は小さくコンコンとドアを叩く音がした。

「部屋の中には上がらないから。玄関先だけ、入れてくれ……顔が見たい」

その言葉にハッとす。この状況じゃあ、周囲の住人に隼さんが不審者と誤解されかねない。

「頼む。話したい」

隼さんの声が苦しそうに聞こえて——私はそつと玄関の鍵を開けた。

ゆっくり開けた玄関ドアの向こうに、ホッとしたように笑う隼さんがいた。

彼は相変わらず格好よくて、私は目を合わせられないまま彼を玄関の中に招き入れた。

「夕夏——」

呼びかけられて視線を上げると、彼はなぜか眉間にしわを寄せている。

「お前は……なんて格好をしているんだ」

今の私は、パイル地の半袖短パンのルームウェアを着ている。でも、怒られるほどひどい格好はしていない気も。それに、寝る前なんてみんな、こんなもんじゃないのだろうか。

「寝る気だったんだもの……」

「そういう意味じゃない。男と会うのに露出しすぎ」

——そういう意味!? こんな時間に男の人と会ったことないから、そこまで気が回らなかつたよ!

予想外の指摘を受け、私の顔は、今着ているピンクのルームウェアと同じような色をしているんじゃないだろうか。

恥ずかしすぎて、顔を上げられない。

いたたまれなくて、ショートパンツの裾を握りしめて、足の親指をびこびこ動かしてしまおう。すると、目の前で呻くような声が聞こえたので、視線を上げて、隼さんの顔を見る。すると目が合った瞬間、顔を手で押さえつけられた。

——これは……アイアンクローってやつじゃないでしょうか! 痛くはないけど。

「プロレス技をかける気ですか!」

「変なことを言うな!」

女性の顔を掴んでる隼さんに言われたくない!

「くそっ……! ここまで理性を試されるとは思わなかった」

文句を言おうとしたところで、隼さんが小さくつぶやき、ぎゅっと引き寄せられる。

一瞬、なにが起きたかわからなかった。

頬に当たっているのは、隼さんの着ているワイシャツ。

初めて男性に抱きしめられたせいで、抵抗することすらできずに、かちんと体が固まる。

「な、なな、なにをしているのでしょうか、隼さん」

必死で紡いだ言葉に、隼さんは私の頭頂部に頬ずりをしながら、呑気そうに答えた。

「ん〜? 充電」

——ええええ? 私に電気は流れてないけど! ロボットじゃないんだから。

隼さんの家を使っているのだから洗剤のにおいと、少しの汗のにおいを間近で感じる。

彼の腕の中は、温かくて、存外居心地がいい。驚きと恥ずかしさが一通り過ぎると、強い安心感があつた。

ちょうど寝ようと思っていたこともあり、いい感じに柔らかくて温かいこの場所は、眠気を誘う。

——ちよつと、体重を預けてみてもいいだろうか。

彼が私の頭にしていた頬ずりが止まり、ますます寝やすくなった。

うん、気持ちいい——

「おい」

「……」

「夕夏?」

「……………」

「寝るな!」

「ふえええ!」

頭を両手で掴まれて、私は目をパチパチさせた。

「なんで寝ようとするんだ、この体勢で」

「気持ちよかったので、つい……」
「……………」

そう言つて彼は、私の肩を片手で押さえて体を遠ざけたまま、空いている手で自分の顔を覆う。耳が赤い気がする。

なぜそんな反応をされるのだろうか？ よくわからず、コテンと首を傾げた。

「くっ！ なんだその反応、可愛すぎるだろ！ 押し倒したい！ それに、会えない理由が『恥ずかしいから』ってなんだ」

セリフの途中に不穏な言葉が入ってた気がするけど、本題はそこじゃない。

やっぱり、さっきの祐子との会話を隼さんは知っているのだ。

「恥ずかしいってことは……俺が気障なことを言わなければ、デートしてくれるのか」

「デッ……！ デートとかも無理っ。したことないし！」

「……………」

——なぜ嬉しそうなんだろうかね、隼さん？

「よし、可愛いと言うのは、十分の九にまで減らそう」

「全面的にやめて！」

「夕夏が可愛すぎて、無意識に出るんだ。多少は仕方ないだろう」

「だからっ！ そういうのがっ！」

「慣れろ」

「ひどい！」

涙目になった私を宥めるように、隼さんは頭を撫でる。

——ついさつき気づいたけど、なぜか隼さんには触られても平気だ。学生の頃は、体育祭のダンスで男の子と手を繋ぐだけで緊張してたのに。隼さんのぬくもりにホッとす。

それに、イケメンな顔をじっくり見るのも好きだ。もちろん鑑賞対象として。

甘いセリフは……冗談でも言われるとドキドキしてしまうので、しゃべらずいてくれればいいのに。

なんて失礼なことを考えていたら、ふと、隼さんが真面目な顔になった。

「そういえば夕夏、明後日の土曜日、なにか予定があるのか？」

「え？ いや、特にないよ」

「じゃあ、仕事？」

「ううん。なにも予定はない……こともない！」

つい数日前に、今週の土曜は用事がある、と言つて隼さんの誘いを断っていたのだった。忘れてた。
必死で言い訳を考えようとするのだけ——

「じゃあ、土曜日、九時に迎えにくるから」

——ああ、すでに話を聞いてくれない！

しかも、さっさと踵を返して帰ろうとしている。私は隼さんを両手で掴んで引き留める。

「無理無理！ そんな急なの！ 着るものとか、コーデとか、悩むし！」
「そっかあ」

にへ〜と、隼さんの顔が緩む。

——私、なにかマズイことを言った？

「つまり、悩むから気が進まないんであって、俺と会うのが嫌なわけじゃないと」

……完全にマズイこと言いましたね、私！

「服、俺が決める」

「は？」

「土曜の九時にここへ迎えにきて俺が決めるから、服の候補を並べて待ってて」

「え？」

「じゃ、おやすみ」

「ちよっ？」

頬にキスを落としてから、隼さんは嬉しそうな顔で出ていった。

「え〜〜〜？」

玄関で一人、彼の唇が触れた頬を手で押さえてへたり込む。

「私の、初キス……」

頬にだけど、キスをしたのは初めての経験だ。それどころか、男の人が家に来たのも、抱きしめられたのだって。頭の中は混乱状態だけど、そのどれもが嫌な気持ちはまったくしていない。

「土曜日、どうしよう」

しばらく玄関で呆然とした後、ベッドに入ったけど、その日は夜遅くまで眠れなかった。

5

「本当に来た……」

「来るって言っただろう？」

土曜日。隼さんは、九時を三分ほど過ぎた頃にやってきた。

そんな彼を出迎えた私は、お化粧は終えたけれどルームウェアを着た状態。

昨夜、頑張って服を選ぼうとしてみたけれど、気合い入れすぎとか、ラフすぎとか、似合わないかもとか、ダサいかも？ とか、とか……考えすぎて、諦めてしまった。

選んでくれるって言うなら、お言葉に甘えようと、服をベッドの上に並べた状態だ。

ルームウェアみたいなラフな格好で会うのはいかなものか、とも一瞬思った。でも一昨日もそうだったし、なんか、もうそれ以上に恥ずかしいことだらけで、今さらだなど感じたくらい。

隼さんを部屋の中に案内しつつ、服を選んでほしい旨を伝えた。

「その服も可愛いよね。一昨日抱きしめたら、抱き心地がよかったし。もう一回抱きしめていい？」
「気障なセリフを減らす努力は!?」